

戦間期オーストリアにおける登山思想—
労働者登山家協会自然の友のリベラル性
Thoughts of Mountain Climbers in Interwar Austria:
Liberality by the Alpine Association for Workers,
the Friends of Nature

古川 高子
Takako FURUKAWA

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Center for Global Language and Society in Higher Education,
Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 第 1 次世界大戦前における急進的リベラル登山思想
 - 1.1. 急進的リベラル登山家ラマーの思想
 - 1.2. 自然の友による急進的リベラル登山思想の受容
2. ブルジョワ登山家の選別意識形成
 - 2.1. 山岳戦
 - 2.2. 山岳戦で生まれたブルジョワ登山家の「仲間」意識
 - 2.3. 「貴族」としての登山家
3. 労働者登山家の選別意識形成
 - 3.1. 山岳戦で生まれた労働者登山家の「精神的高揚」
 - 3.2. 男性性と「ドイツ人」であること、平等性の希求
 - 3.3. 「社会主義的登山」との妥協

おわりに

キーワード：山岳戦 国民化 アルピニズム

Keywords: Mountain Warfare, Nationalization, Alpinism



【要旨】

本稿は、19世紀後半から広がるオーストリアの登山家たちのリベラル登山思想が、世紀転換期に設立された労働者登山家協会自然の友によっても受容され、第1次世界大戦を経て政治的に対立する陣営社会となった戦間期に至るまで維持されていた事実を提示し、労働者登山家は、社会民主党が求める「手段としての登山」を通じた社会主義社会の実現には関心を抱かなかつた理由を思想的に探究するものである。労働者登山家は苦しい登攀の後に頂上に立つことで、自立心や自我、あるいは個性を見出し、さらに山上ではブルジョワ登山家と平等であり登山仲間であるという意識を抱くようになった。自由主義社会のリベラル思想には、登山可能な経済力のある男性ならば、労働者でさえも平等であるとみなす寛容さがあつた。その思想に同意して労働者登山を広めた自然の友は、実際の社会においてブルジョワジーとの平等感や仲間意識を既に獲得していたため、未来社会に希望を託す党の方針には同意できなかったのである。

Main theme of this article is to clarify, how the mountain climbers' association for workers in Austria, the Friends of Nature, accepted liberal mountain climbing thoughts by bourgeois mountain climbers. The workers' alpine club maintained such thoughts even during the interwar period of political conflicts. The worker's mountain climbers had experienced sense of equality, independence and friendship with bourgeois mountain climbers on the top of mountains after hard climbing. Therefore, they did not need struggling for the socialist society as the Social Democratic Party hoped. They believed that their ideal equal society had already come true in the real world. It was generous of liberal bourgeois climbers, especially intellectuals, to admit strenuous efforts by male worker's mountain climbers.

はじめに

登山家たちが残す山行記には登攀の記録とともに、時として登山家の自然観、社会観、職業観そして登攀自体に対する意識も記された。本稿ではそれらを読み解きながら第1次世界大戦前後のオーストリアの登山家、とくに労働者登山家の思想に注目し、彼らがいかにしてブルジョワ登山家たちが有していたリベラルな登山思想を受容し、それを変容させながらも、自分たちがリベラルな登山家であろうとしていたかを明らかにしていく。

戦間期のオーストリアでは、連邦レベルにおいてはカトリック司祭や保守層の利害を代表するキリスト教社会党が政治を担ったが、首都のウィーンは社会民主党が1918年から1934年の内戦で敗退するまで市政を司り、「黒の中にある赤い孤島」とも表象し得る社会だった。そこに19世紀の自由主義社会を率いていたドイツ系リベラル（以下、リベラルと略記）の思想を受け継いだドイツナショナルも加わって、いわば三つ巴の陣営社会が築かれつつあったのである。

本稿で分析する登山家たちもそれぞれの陣営にあった複数の登山家協会に所属していた。しかし、オーストリアにおいては19世紀後半に設立されたドイツ語圏最大の登山家協会ドイツ・オーストリア・アルペン協会（以下、アルペン協会と略記）¹⁾の中でも最古のオーストリア支部がウィーンにあって大きな力を持ち、それ以外の登山家協会を配下に置いていたため、登山家諸協会は往々にして共通する思想を有していた。

この協会を主として構成していたのはリベラルと呼ばれるブルジョワジーであり、財産権や市場競争を重視し、経済的自立のための努力を求め、教養としてのドイツ語とドイツ文化を理解する男性を理念像としており、彼らはその条件に見合えば、民族への帰属に関わらず「ドイツ国民」であるという思想を抱いていた。しかし、彼らが理想としていた「国民」には、これらの条件に当てはまらず、自立できないとみなされた女性や経済的階層的に劣っているとされた労働者などは含まれなかった。とはいえ、努力して経済的自立を果たそうとする男性労働者や職人に対してはこの思想をもって啓蒙し、その「国民」の内側に繰り入れるだけの寛容さは有していた。

アルペン協会に集った登山家たちはこのリベラルの理想を登山に当てはめた。彼らは登山を自立的個人の人格形成や心身鍛錬の手段、教養を高めるための文化活動だとみなし、登山を通じて辺境の山村を開発することで新しい思想や行動様式を広めて地域住民を啓蒙し、生活水準を上げることが公共の福利に資するものだと考えていたのである [Gidl: 33-35]。アルペン協会は富裕層からなっていたため、多くの避難小屋（以下、小屋と略記）を有していた。リベラルだった彼らは表だった支配はせず、他協会会員にも自協会が有する小屋を会員割引料金で利用させていた。しかし、アルペン協会的小屋を会員割引料金で利用できるのは、少なくとも一軒の自前的小屋を保有することができた登山家協会のみだった。19世紀後半から20世紀初頭の時代に、ウィーンから離れたアルプスに小屋を建てるには莫大な費用がかかり、簡単に実現できるものではなかったのである。だが、努力して自前的小屋を持たた暁には、数多くのアルペン協会的小屋を会員と同じ割引料金で利用することができた。これは小さな登山家協会にとっては魅力的であり、その権利の付与は、一人前の登山家協会としてアルペン協会以外の登山家協会からも承認されることをも意味していた。それゆえ、登山家協会はアルペン協会の思想に賛同してその傘下に入っていったのである [古川 2014]。

さて、世紀転換期に向かう産業社会発展の時代、登山人口が増え、多様な階層からなる登山家協会が生まれたが、その中の一つに自然の友があった。1873年の大恐慌後、第2次産業革命が起こる中、農村から都市への人口の集中と住宅難によって病気が蔓延していたウィーンにおいて、登山を通じて労働者の健康を改善しようとした社会民主党員である左派リベラルの知識人の発案をもとに、社会民主党に共鳴する職人親方や学生らが集まってこの協会を1895年に設

立した。小さく貧しい登山家協会ではあったものの、その協会の指導層は既存のブルジョワ登山家協会に属する優秀な登山家たちであり、当時の登山家たちのリベラルな思想を共有する人々であった。アルペン協会の小屋を利用しなければ、登攀することが難しいほど大きな勢力を持っていたアルペン協会に、自らが登山家協会であることを認めさせる、これが当面の目標となった。設立から10年を経た1905年、ティロールの山中に小屋を建てる計画を公にすると、アルペン協会の中でも最も権威があり、多くの小屋をもつオーストリア支部から小屋利用の割引を獲得することができたのである〔古川 2002; 2008; 2014〕²⁾。

では、この労働者向け登山家協会自然の友はブルジョワ階級登山家が有していたリベラルな登山思想をどう受容し、発展させていくのか。ここでは、第1次世界大戦を挟んだ時期の変化を中心に検討するが、先に大戦前の彼らによって行われた受容の状況を押さえ、それが大戦後にどう変化するのかをみていきたい。

本稿は戦間期オーストリアについての歴史叙述の通説である陣営対立論を自由主義と国民主義の連続性という視点から捉え直す作業の一環であり、労働者によるリベラル思想の維持を明示することで、戦間期における政治的支配が民衆の生活世界にまで浸透したとする全体主義論を批判的に再考することが意図されている。

以下、第1章では第1次世界大戦前のブルジョワ階級登山家の思想およびそれが労働者階級登山家にどのように受容されたかをまとめる。第2章では第1次世界大戦によるブルジョワ階級登山家の意識の変容を、同じく第3章では労働者階級登山家の意識の変化を検討し、双方とも山岳戦を体験したことから共同性や選別意識、さらには登山家にのみ当てはまる平等感などが涵養されたことを明らかにしていく。

1. 第1次世界大戦前における急進的リベラル登山思想

1.1. 急進的リベラル登山家ラマーの思想

自然の友は、その設立時期にかけて広まった急進的登山思想を主張する登山家ラマー³⁾を模範とした。ラマーはアルペン協会が推奨していたガイド付きで、費用・日程に余裕があり、自分の足で登るといふ苦しみはあるが、自然を楽しみ景観を眺めて精神性を高めることを重視する登山、そして直接間接に地元民の生活を豊かにし、彼らに啓蒙をもたらすのが登山であると述べて正当化する当時の登山家たちの発言を批判した。ラマーが望んだのは、自己と登山の関係を問い、登山自体に自己実現を求めるものだった。経済的再編の時代、日常では職業の専門化が進み、全体性という点で男性性が脅かされていると感じた若い世代が、味気ない労働・生活状況とは異なるものを願ったのである。彼らは単独、ガイドレス、高山・難関登山を行う業績

志向型の登山を求め、速さ、高さ、強さを個人的業績として承認させようとした。その中であってラマーは、業績のみではなく、むしろ登山行為によって人間の自立性や精神力が高まることを認識すべきだとした。産業主義、大都市の文明や機械の奴隷になってしまっている人間は、自然に立ち向かえる登山を通して、本来人間が有していた人間性を取り戻すことができるというのである [Lammer 1908]。そして、安心を求めてガイドに頼っても実際の危険は減らないのであるから、むしろ自ら進んで生死の限界を体験すべきであり、一般に真・善・美とみなされるもの一切が、生死を分ける瞬間は無価値なものとなり、生きる力にしがみつこうようなその一瞬を経てはじめて生の意味が理解できると主張したのであった [Lammer 1922: 156]。社会に善をもたらすものが登山であると主張したアルペン協会の登山がリベラル登山だとすれば、ラマーの登山は善をもたらす登山という発想自体を批判する急進的リベラル登山ともいえるものだった。とはいえ、ガイド登山を彼が嫌うのは、ガイドが自らの意志からではなく、生活のため、経済面から登攀せざるを得ない状況にあることへの批判が根底にあったからであり、弱者へ視線を投げかけることも忘れていなかった [Walkner 1996: 294-300; Günther: 164-167]。彼は労働者層の登山についても寛容であり、「強き自我による相手なしの競争、報酬を目標にしない闘いが自己形成の源となる。その体験は労働者一般大衆にも開かれているべきである」[NF 1907: 173; MDÖA 1908: 47-49] と述べて、自然の友の活動を称賛し、彼の急進的思想をもって自然の友を啓蒙しようとしたのであった。

1.2. 自然の友による急進的リベラル登山思想の受容

自然の友は登山家協会としての力を示すため、機関誌『自然の友』が創刊されるやいなや当時、最難関と目されていたダッハシュタイン南壁やエンスタール最高峰のホッホトア北壁登攀に挑み、ラマーも所属していた急進的登山を推進するオーストリア・アルペンクラブのメンバーと達成時間を競った様子を掲載した [古川 2002: 290]。近郊の山地やウィーンの森への遠足、東アルプスへのガイド付きツアー案内と共に会員同士のパーティ、ガイドレス登山や難関（ヴァリエーションルートやクライミング）登山、登攀時間や標高、登山の困難さも記した登攀記を積極的にその雑誌に取り入れ、アルペンクラブやアルペン協会諸支部にも属す二重会員をも機関誌に示すようになった [NF 1902: 33; 1903: 11-12, 53, 86, 93-96; 1904: 41, 74, 126]。ウィーンの登山家諸協会から構成されるウィーン救援委員会（1895年結成）に入会し、共同の救援活動も行うなど本格的な登山を開始したのである [ÖAZ 1899: 46; Happsich 1970: 80; NF 1902: 86]。

自然の友は、労働者であるということによって周囲のブルジョワ登山家協会から見下されないように、ブルジョワ登山家たちが通常、登山家に対して用いるツーリスト Tourist という言葉に「善良で品行が良く登攀能力がある登山家」という意味を持たせたり。そして登山家協会

自然の友に属す限りにおいては、遭難者の遺体の写真を撮るような「不品行なツーリストであってはならない」と主張し、登山ルールを守らない会員たちを注意した。いわば「ツーリスト」という言葉に善の意味を持たせ啓蒙しようとしたのである。また、一般会員たちにとってツーリストとなることは憧れでもあったゆえ、「ツーリストの衣装を着けると新しい人間となる」とも記された。平地においては階級差と職業差を感じながらも、山上ではツーリストとなることで、ブルジョワ層の登山家と平等になると認識するようになったのである [NF 1904: 109, 129]。しかし、ツーリストになるのは難しく、身体的精神的にまずは強靱でなくてはならないと指導層が指南した。心身の弱い者は羞恥心や自惚れから不可能なことをしがちであると注意がなされ、一握りの頑強で勇敢な登山家のみがアルプス世界の自然を享受できるとされた。さらに、ガイドレスツアーを好むのはガイド料の節約という点からばかりではなく、アイゼンなしでは登れないような「険しい雪氷の壁」を登り、「自分自身の知識と力でより困難なことを克服するときのみ喜びを見出す」からだと述べている。つまり、自制も含めて善悪の判断ができるツーリストとして、ラマーが述べる危険を乗り越えることができる自立した人間として、山頂を克服することが求められていたのである [NF 1902: 3; 1904: 88]。

自然の友の登山家は、変化に富む自然と格闘することで人間の尊厳が増し、自然の持つ無言の力強い言葉と会話をすることで人間の力も発展するのであるから、業績のみを求めるのは本来のアルピニズムではなく、登山は人間を高め、幸福に導くものとして捉えられるべきであると主張した [NF 1906: 153-154; 1914: 200]。この見解は、ラマーが述べた業績や記録ではなく登攀の過程自体を重視し、人間のあらゆる能力の向上こそが登山の目的であるとする主張に一致するであろう。

このような「ガイドレス登山を行う優秀な高山ツーリスト」が所属していることを自然の友は誇りにしていた。それゆえ、会員が「未熟である」ことと労働者ツーリストであることが結びつけられて解釈される場合には強く抗議した。自分たちの協会に所属する会員は豊かな経験を有し、他の名望ある登山家協会の会員達にも受け入れられていると明言し、軽々しい判定を下すべきではないと主張した。そして、それを裏付けるための克己と努力を会員に要求することになったのである。軽い気持ちで向こう見ずな行いをして死者が出た場合には、「名誉心に駆られ、狭いスポーツ仲間の中で大胆不敵さ」が求められていたからだ誌面で責め、徹底的に啓蒙する必要を説いた。だが一方で、「詩人の言葉」として「山の上には自由がある。山の上、そこは素晴らしい」といった寸言をも雑誌に記しており、会員を厳格に処すのも努力に値するだけの価値や魅力が登山にあることを多くの労働者登山家に伝えようとしていたからだと考えられる [NF 1902: 71; 1904: 89; 1906: 142; 1907: 131-133; 194-196]。

また、ツーリストへの帰属感は彼らだけが得ることができる仲間意識をも生み出した。ガイ

ドレスで南ティロールのチェベダレ山に登った会員は、通過した温泉場メラーン/メラノを「病人と自分を病人だと思い込むことが許される」社会階級がある場所だとみなし、「そそくさと釘付き登山靴に履き替えて平地を逃げだし」山に向かった。2273mにあるアルペン協会ドレスデン支部の小屋に泊まったが、「そこにいたわずかばかりの同じ登攀の意図をもつ仲間たちと楽しい夜と稀にみる静かな夜を過ごせたことに感謝した」と記している。有閑階級とは異なる存在だと意識しながらも、この筆者は登山家としてブルジョワ登山家たちとの一体感を有していたといえよう。ここからは労働者階級としての意識よりもむしろ、一人前の登山家であるという自負心が読みとれる。彼は「偉大なドロミーティの壮大な崇高さをもつ」山頂に仲間と立った時、「二人の大胆不敵な小さな人間が高貴な目的を達成した」とも表現しているところから、階層・階級ではなく人間と自然という対比で思考していたと考えられる [NF 1902: 33; 1903: 2; 1904: 88]。もちろん、自然の友ではブルジョワ登山家協会会員たちが行っていた山中での挨拶「ベルク・ハイル」の代わりに「ベルク・フライ」という挨拶を会員同士では行うことが推奨されていたが、登攀自体に階層差があったわけではなかったのである。

こうして「時間と金」[NF 1903: 90]という障害を克服した後によりやく得られる平等と自由を意識していたからこそ、自然の友は闘いの過程を重視し、精神性の高い登山を行った。その範例だったのがラマーである。ラマーはアルペン協会ニュースレター(1910年10月31日付)にロッククライミングや登山において実際に賞金付競技が行われている現実を批判する文章を載せ、最新のタイムウォッチを利用した記録作りは他のスポーツでならば可能だろうが、登山においては不可能であり、個々人の業績を相互に比較するのは登山家の本質からいっても適当とはいえないゆえ「私は拒否する」と主張した。自然との連帯感を理解してこそ登山は可能であるのに、競技では参加者も観客もそれを無視するから、というのが登山競技を拒否した理由であった。自然の友は、1911年3月号の機関誌『自然の友』において「我々はラマー教授と同じ立場にあり」、彼の文章に刺激されて協会雑誌への競争的スポーツに関する記事掲載禁止の決定を下したと述べた [NF 1910: 76-79, 128; 1911: 20-21; MDÖA 1910: 243-245; 古川 2004: 297]。自然の友の指導層は以降、戦間期を通じて公的な競技会について否定的な態度を採り続けた。彼らにとっての登山は自然との対話を通じた自己陶冶・啓蒙の手段でもあり、それはラマーによる啓蒙の成果でもあったのである。

では、このような19世紀自由主義社会の思想下に形作られた自立や平等を希求する登山は、第1次世界大戦を経てどうなるのか。次章以降でブルジョワ層登山家と労働者層登山家の登山に関する意識の変化を検討していく。

2. ブルジョワ登山家の選別意識形成

2.1. 山岳戦

第1次世界大戦によって、これまでにないほどの人員がアルプスに投入されることになった。それは1915年に始まった戦いが二重君主国南縁にある東アルプスを挟んでドイツ・オーストリア側とイタリアとの間での山岳戦となったからである。スキーやハーケン等の登山補助用具の利用、登山道の開発、簡易ロープウェイやリフトの設置等に加えて双方の登山家が兵士として投入された。1907年の時点で軍と協定を結び、戦時には小屋と登山道を供出することになっていたアルペン協会は、1914年8月、戦争が開始されるや「荣誉のための戦いと祖国の防衛」とに同意したことを表明し、登山家の有する身体的屈強さと精神的忍耐強さが戦争を遂行するのに適していると述べて、戦争に全面的に協力すると宣言した [MDÖA 1914: 201, 230-231]⁵⁾。そして1915年4月、イタリアがロンドン秘密条約により「未回収のイタリア」の返還と引き替えに三国協商側に加わり参戦したことで、その宣言が現実になったのである

まず、協会が有していた道路や小屋（既存の毛布や食品、救援用具なども含む）が軍により徴用された。戦地の小屋は軍の「高山で唯一住むことができる宿舎」になり、一部には軍の指令部が入り、銃後の小屋は軍事演習時の休憩所や監視所、ラジオ局ともなった。アルペン協会の小屋の約三分の二が戦地またはその近くにあり、見渡しのきく場所にあった小屋は、イタリア側から標的とされる一方で、ドイツ側の団結の象徴ともなった。そうした小屋は、会員兵士たちの「オーストリアの国家思想の守り手であり、ドイツ人の闘士」であるという士気を喚起させたと言われている。アルペン協会は山岳戦に向けた兵士の訓練、登山家の選別や山岳地図の提供なども行い、全面的に大戦に協力した。戦地での地理等に詳しい人物を顧問として徴用することが許可され、その氏名リストはアルペン協会諸支部から軍務省に伝えられた。経験のある登山家は優先的に山岳戦に送られ、さらに未召集の場合でも協力依頼できるようになったのである [ZDÖA 1919: 183; Gidl: 343-345]。

2.2. 山岳戦で生まれたブルジョワ登山家の「仲間」意識

では、参戦した登山家たちの意識はどのようなものだったのか。アルピニズム⁶⁾の言説分析を行ったギュンターに依れば、山岳戦を通じて意識の平等化・民主化が進んだ。登山を戦争の準備であるとする登山家の一人レンカーは、1917年、アルペン協会ニュースレターに「戦争における登山家」という論考を著し、次のように述べた。登山家である将校や兵士が山岳戦によって山岳ガイド以外にはじめて山地住民と直接的に接触し、スポーツとしての登山の意味を知らずにいた山農にクライミングを行う勇氣、岩の選別眼、氷雪のテクニクなどを教え、彼らに野心や関心を芽生えさせ、それによって登山家と地元住民の将来にわたる平和的關係が作

り出された。ギュンターはこの様子をアルピニズムの大衆化の機縁とし、戦争が生み出した肯定的な副作用だとして「戦争が登山家を作った」と述べた。ギュンターはまたレンカーの論文から、スキーの際に一兵卒が転んだ将校を見て笑ったが、将校自身も笑ってごまかすことで上手く切り抜けたという例を挙げて、彼らが軍務以外で平等な人間同士として、山仲間として接することが可能となり、社会的格差が解消される効果があったと解釈した。平地戦では塹壕共同体が生まれたが、山岳戦では登山仲間によって連帯感が生じたというのである。さらにギュンターは、山岳戦では決闘のごとく「一人の男対一人の男」という「伝統的な騎士同士の闘い」が行われた上、敵方であるイタリア側の山岳兵士アルピニを、敵というよりもむしろ優秀な兵士であり、素晴らしい、大胆なアルピニストでもあると指摘し、登山家同士の繋がりを強調した [MDÖA 1917: 55-57, 140-145; Günther :251-254, 261-263] 7)。

こうしてギュンターは、第1次世界大戦が農民をアルピニズムに引き入れ登山家にすることで、平等な社会関係を築いていくという発想が登山家に生まれたゆえ、山中では社会的格差が解消され、敵をも登山家という枠内に引き入れて考える傾向が出現したことを指摘した。いわば、登山家の思考の地平が大戦によって拡大されたということになる。だが、登山がリベラルによる文化活動であったことを想起すれば、ここには自発的か強制的かの差異を問わず「登山家となる」という前提があったことに注意が向けられなければならない。労働者層からなる自然の友の会員が山行によって平等になると考えていたように、山岳戦を戦った登山家たちも、山農は登山家となってはじめて社会的格差が解消されるとみなしていた。そこには一定の階層差、登山家である「我々」が他の兵士あるいはスポーツとしての登山を知らない人々より優れているという意識が隠れてはいないだろうか。山岳戦を経験した登山家が山行記を書く時点で、山農・兵卒を「登山仲間」に、「敵」を「騎士」へと上昇させている点、あるいは強いられた戦いであったものが、自発的な「決闘」であるとみなされている点により高位にある登山家の意識が心性のレベルで表象されていると考えられるのである。それは登山家たちの排他性ともいえるものであった。彼らによる登山の拡大は、登山を民主化させるのではなく、男性中心の階層的排他的思考を持つ人々を増加させることさえ意味していたであろう。

こうして自立性の重視、自然への対峙を通じた理解、文化活動としての登山と捉えるリベラル登山家たちの思想は、大戦を通じて他に対する優位あるいは排他性を強調しつつ、仲間意識という形で維持された。その「我々意識」は敵に対して戦った「ドイツ人登山家」という集合的意識ともなり得たのである。

2.3. 「貴族」としての登山家

敗戦後解体されたオーストリア・ハンガリー二重君主国の「残部」となったオーストリアに

居住していたドイツ語話者は、領域や人口が極端に縮小し、依って立つ主要産業が失われ「生存不能」な国家とみなされたにもかかわらずドイツとの合邦が適わなかったため、不安定なオーストリア国家への帰属意識を持たずにいた。それと踵を返すように、二重君主国時代に支配的地位にあったドイツ語話者であるという意識が前面に出てきた。いわば、彼らは「ドイツ国民」「ドイツ人」でありながら「オーストリア国家」に属するという帰属の不一致の状態に陥ったのである。ここでは大戦後に登山家たちが有した「ドイツ人」意識がどのようなものだったのかを考察する。

1919年10月、第1次世界大戦後初のアルペン協会ニュルンベルク大会において第1会長シドウは、山への愛と山の眺望によって生じる精神的解放の希求が理想であることに変わりはないとして、協会の非政治性の維持を強調しながらも、ドイツ語圏の政治的境界（国境のこと）を越えた繋がりを求め、武器の代わりに自然の暴力と格闘することで身体的堅強さを培う必要性を唱えた。同大会では「登山家グループ Bergsteigergruppe」を自称する人々も現れた。彼らは主としてドイツのバイエルンラント支部とミュンヘン・ホッホラント支部会員から構成された任意団体で、この大会で採択されたニュルンベルク指針の大枠を用意した〔MDÖA 1919: 125; Günther: 93〕。そこでは「ドイツ人」の男性性が強調され、登山を困難に立ち向かう登山家の養成と身体的・精神的訓練だとし、小屋や登山道の建設を「登山家の欲求に見合ったもの」にするべきであると記された。さらに登山家はあらゆる権利義務において平等であり、同時に共同体という意識を共有するべきだとも述べられた。支部単位で加入した登山家グループは1920年代活発に行動し、ニュルンベルク指針に同意する諸支部を勧誘し、登山家グループに引き入れようとした。彼らは1923年のバート・テルツ大会においても小屋をできる限り減らすとともにアルコール禁止、小屋への避暑客や登山と無関係な映画撮影関係者等の宿泊禁止、羽布団、蓄音機などの使用禁止、未婚の男女の同室宿泊禁止といった道徳的な規則の制定を動議とした。それを執行委員会がまとめ、決議を促し、経済的不安定さも相まってさしたる反対もなく承認されたことは、1919年以降、登山の大衆化に反対し、小屋無しでも登ることができる人々に登山を限定する方向に同意する会員が協会にかなり存在したことを物語っている〔MDÖA 1921: 17-18; 1923: 34, 49-50; Achrainger/Mailänder: 210-212, 215〕。

1922年大会ではミュンヘン・ホッホラント支部長ミュラーが「山と山がドイツ民族再建のために有する意義」と題した講演を行った。彼は「ドイツ人とドイツ人青年たち」が山との格闘で心身ともに強靱となり、自然の法則に基づく闘争によってハイマートへの愛情が突き動かされ、再びドイツ人が強い民族となり、「全ドイツ Alldeutschland という宝」が防衛されると主張した。登山家グループの一員であったミュラーは、1924年の大会では登山をする際、自然との格闘で「全自然の原始的力」を得て貴族となり、「天蓋の神と力を求める」ことになるが、それ

がまさに、「最高のものを求める際限のないファウスト的衝動であり、原ドイツの本質だ」と述べ、登山の精神性を強調した。1927年大会においても彼は、「自然保護ばかりではなく、ドイツ人のハイマートおよびドイツ人の山の世界をドイツ的に維持すること」を主張し、協会定款の第1条第1項設立目的の最後に「ドイツ人のハイマートへの愛を保護し強くすることで（東アルプスの）美しさと原初性を維持すること」を付け加える動議を出したのであった〔ZDÖA 1922:1-10; MDÖA 1924: 211; 1927: 224, 226〕。「ドイツ人」を自然に結びつけようとする発想は敗戦やインフレにより依って立つ足場が弱まったと感じた「ドイツ人」がより大きな自然と自己同一視し、そこに帰属を求めることで自己存在を確認し、「ドイツ人」としての意識を強めていく過程であり、国民主義の土台となる。そこに社会ダーヴィニズム的発想が加わって、人間と環境としての自然の境目を取り去る発想へと至り、美しい自然の中だけで人間そのものも純化し、美しく、高貴なものになっていく、という考え方が示されたのである⁸⁾。

一方、アルペン協会内には「協会を大きくしてきた居心地の良さを求めるツーリストを顧慮するべきである」と主張する会員もいた。その代表的な人物がオーストリア支部の E. ピヒルとツーリズムが盛んであったインスブルック支部代表フォルシャー＝マイヤーであった。1925年、登山家グループに属すバイエルンラント支部は、小屋や登山道建設は完了したのでこれ以上は必要なく、アルペン協会を登山家のみからなる協会へ作り替えるべきだと要求した。いわば、東アルプスでのツアーを容易く行うために小屋や登山道を建設するというアルペン協会設立以来の目的を変更すべきだとしたのである。それに対しフォルシャー＝マイヤーが高山における登山道や小屋建設は終わってはならず、ウィンタースポーツ用にさらに多くの小屋が増築・改築されるべきだと反対し、ピヒルもこれに同意した〔MDÖA 1911: 196; 1919: 104, 130, 1925: 233-236; Achrainger/Mailänder: 212〕⁹⁾。

小屋建設に関してはこのような意見の相違があったとはいえ、オーストリア側もドイツ側も登山家たちの意識は「ドイツ人」であることの共通性によって一致していた。ピヒルは既に1925年大会でハイマート保護を提唱しており、オーストリア側からドイツとの合邦で完成される「全ドイツ」を主張する政治運動家でもあった。そして1921年にはユダヤ教徒を協会から排斥する運動を開始した上、1923年、アルペン協会の入会資格を「敵国の外国人」から剥奪しようともしていた。これに対してミュラーはドイツ側から「全ドイツ」思想を主張しており、両者はツーリズムを登山家ではない「ドイツ人」一般に開くか否かの点で相違していただけだったのである〔MDÖA 1925:245-24; 古川 2018a〕¹⁰⁾。

一方、「ドイツ人」であることを強調する傾向は、ピヒルと対立したラマーの主張にも窺える。ラマーは大戦前には記していなかった文章を1921年、高山での競技に関する論考に付け加えた。彼は言う。英国のスポーツは商業的なものになっており、「文化」を疎外する点で「非ドイツ的」

であり、「私たちの民族 Volk を健康に、強く美しく育成したいならば、私たちの青年を空気と太陽の中で力強く、あらゆる面で活動させ、大きな自然に合致するまで成長させなくてはならない」。そしてその理由として、「人種衛生学」「優生学」という学問名を列挙したのである [Pichl: 161-164; Lammer 1923: 251; ÖAZ 1911: 19-25]¹¹⁾。さらに、同年の別の文章においてもラマーは山が神の象徴であり、山が自分に力を与えて助けてくれるとし、その神的な感覚が「北方諸国の魂 Nordländerseele」であり、その感覚をもって山に挑む人々は、個々人の差異を超えて一つの共同体を形成するとも述べた [Lammer 1923: 160-161]。いわば北方民族説を称揚する発言を行ったのであった。

こうして第1次世界大戦後、ブルジョワ層の登山家たちは、登山を一般に開くか否かに関わらず、自分たちは山岳戦へと特別に投入されたという選別意識と階層を越える仲間意識を持った上、そこに「ドイツ人」意識を付け加えた。アルピニズム史を専門とするアムシュテッターはこの様子を、「ドイツ民族」を登山によって堅強にすることができると思うブルジョワ層登山家が「貴族」であると自認し、次世代を担う青年育成の役目を引き受けようとしたのだと述べた。そしてその理由をプロレタリアートによる大衆登山とは異なることに求めたのである。 [ABZ 1934: 37; Amstädter: 345, 400-401]。共和国の成立に伴い貴族の存在が否定された当時、それに代えて優秀な登山家を「貴族」とみなす意識が生じたのであろう。だが、呼称は異なれども、同様な選別意識は、労働者登山家にも生まれていたものであった。

3. 労働者登山家の選別意識形成

第1次世界大戦に参戦した登山家たちは、自然の中で行う登山が男性の心身を健康にし、「国民」あるいは「ドイツ民族」を健全にすることに繋がると考えるようになった。それは敗戦に伴う無力感を克服し、未来へと繋げる一つの方策でもあった。ブルジョワ登山家協会は戦後、アリア条項の導入など制度的に反ユダヤ主義を導入するが、それに反対する登山家も存在した。その代表的な例がラマーである。彼は人種思想や「北方神話」を肯定しながら、反ユダヤ主義者ではなかったのである¹²⁾。自然の友の名誉会長ロウラウアーも1920年、会員だったオーストリア・ツーリストクラブにアリア条項が導入される際には反対し、それを受けて自然の友は1921年以降、反ユダヤ主義者ピヒルが率いるアルペン協会オーストリア支部から排除されたユダヤ教徒を受け入れた [Amstädter: 276-278; 古川 2014]。そして、自然の友はブルジョワ登山家協会との連携は続ける一方で、「ドイツ民族」としての登山を主張するようになるとともに、20年代半ばには「社会主義的登山」に関する論考も機関誌に載せ、ブルジョワ登山家協会の進める登山とは異なるものを模索しはじめる。ここでは自然の友が「社会主義的登山」とリベラル登山をいかに折衷したのか、さらにそこに国民化の方向性を付加することでいかにして

独自の登山を創り上げようとしたのかについて論じていく。

3.1. 山岳戦で生まれた労働者登山家の「精神的高揚」

戦地の野蛮さや悲惨さを体験する中で、「埃にまみれた西ロシアの大地から南ティロールのチンネへと転戦を志願した」会員達も多かった。南ティロールには難関な高山が多く、ウィーンからはなかなか行けない場所でもあったゆえ、憧れの地だったのである。イタリア戦線に向かった会員は「カルストを練習した後、1400m程度の易しい山、そしてイタリアの自然の美しさも楽しんでいる」という便りを自然の友宛に送ってきた。自然の友の指導層の一人もイタリア戦線におり、ヴェネチア平原のタリアメント川にいる様子を伝えてきた。彼は北側にヴェネチア・アルプスが見える場所で、リエッツからみたドロミーティを思い出し、「爆弾や軍服、武器を置いて、草原を歩き回りたい。砲弾の火を見て私たちが戦争中であることを思い出さないですめば(どんなにいいだろう)」と書いてきた[NF 1917: 64-65; 1918: 39; *M. Wien, NF 1918 (1/2): V*]。

この描写が示唆するように自然の友はアルペン協会とは異なり、戦争中、反戦の態度を貫らぬいた。彼らは戦争反対の意見を機関誌『自然の友』に掲載したため、検閲で記事を押収される場合もあった[NF 1917: 64-65]¹³⁾。しかしほとんどの場合、戦争を批判するような表現はそのまま『自然の友』に掲載された。野戦郵便でもたらされた書状には、静けさの中、鳥の声のみ聞こえる山地で「緑の海」を歩きながら、「一体いつ、何によっても妨げられずに神のような太陽の下をヴァンデルンすることができるのだろうか。...手榴弾や地雷に怯えずに、武器やガスマスクなしで歩けるのはいつだろう。だが、そういう時代は再びやってくる。そのとき私たち自然の友は、生命の泉へと巡礼し、とりわけ、こうしたきちがいじみた民衆殺戮を防ぐことが必要だ」と記されていた[NF 1916: 160-161]。

自然の友は1917年、アルペンクラブの協会誌『オーストリア・アルペン新聞』に掲載されたリンツのダイによる「戦後のスポーツ登山」という論文を引きながら、戦前から進展しつつあった記録のみを追い求めるスポーツ登山は戦後には廃れ、登山家は自分の最高の力を試そうとはするが、戦争の恐怖を知ったからには無意識の内に生命を賭けるような危険なことは行わなくなるだろうと述べ、この論文の主張に同意した[NF 1917: 88-89]。また、戦争を通じて労働者登山の意味を再吟味するような山行記も掲載された。『自然の友』1918年11/12月号の「頂上の感慨」と題するウィーンの一会員から投稿された文章には、登山家が苦労しながら山頂に至る経過が心理的描写とともに記されている。「私は下方の深淵を見つめ考える。私をここまでやって来させた力が自分にはあるのだと意識する。頂上を極める者を強いるような誇りに満たされるのだ。斜面から斜面へ、岩から岩へと格闘しながら、上に登っていく。歓声をあげて最

も高いところへよじ登る。完登！勝利したときのような喜びが私の中にある。なんと苦労したことか。だが、私たちは疲れてはいない。なんと多くの新しい形や色が嵐のように入り込んでくるのか。暗い影を思い出すような時代はもうないのである」。著者ポスプスは、仕事場での枯渇した「生活感情を新しく発展させる」、それが山岳スポーツだと主張した。この文章には編集後記が付され、「平凡な労働者が自ら世界をどのように構成しているのか」ということがよくわかる文章ゆえ、一切、手を加えずに掲載したとされ、肉体的業績だけではなく、「精神的な高揚」をも求めるのが新しい時代の登山なのだと付言された [NF 1918: 137-139]。この文章が出されたのは第1次世界大戦敗戦後の混乱の最中、共和国となり、労働者にも同権が与えられた時期に当たっており、意気揚々とした未来をも期待する意識が伝わる内容を編集者側が掲載したかったのだともいえよう。とはいえ、登山という点だけに目を向けると、一人の人間、労働者登山家が生きていくための力は、登山を通して確認され、同時に完登できる人間としての自負心が人を生かすであろう様子が伝わってくる。この時期より前の『自然の友』誌にはこのような文章がなかったことは、編集後記からも理解される。つまり、戦争と敗戦、さらには共和国となったことを通して、ブルジョワジーの模倣ではなく、精神的なものをも含めて登山の意義が労働者層登山家に見出されるようになったということなのである。但し、そこには登山をする、完登できる登山家であるという自負心を見出すことができ、リベラル登山の排他的要素も含まれていた。

3.2. 男性性と「ドイツ人」であること、平等性の希求

登山を「ドイツ民族の本質と奥深く結びつくものだ」とする『自然の友』誌にも数は少ないが男性性を強く前面に出した登山も掲載された。1920年「闘いは男の本質である」と主張するベルトゥルは、生存競争によって生じる闘いには心身の力が必要であり、それを鍛えるのが自然の暴力との闘いである山行だとした。意識的に闘いと危険を求めることが心身を強め、内面的価値を創造し、人生を楽しくさせ、男性は「行動 Tat」への衝動を求めてはじめていきいきとするというのである [NF 1920: 86-88; 古川 2014: 13]¹⁹⁾。ラマーも1914年に「アルペン・タート Die alpine Tat」という言葉を利用していましたが、それは責任感をもって難しい山への登攀を行うことを意味していた。その「タート」は神的な力を得て人間の全力を喚起・統合させ、登攀という目標に向けてそれを行う際に見いだせる調和でもあり、それを行える人間が「完全なる人間 Vollmensch」だと主張した [Lammer 1923: 155-161; Walkner 1995: 205]。

さらに、『自然の友』誌に寄稿されたラマーの文章にも「価値のあるドイツの本質、つまり最も深い自然感情という貴重な宝もの」といった表現が出現した [NF 1926: 63-64]。自然の友は、1920年代後半数回にわたって、これらの論文が掲載されたラマーの『若き泉』を紹介し、内容

を絶賛している [M. Wien, *NF* 1921 (11/12): IV ; *NF* 1932: 78]¹⁵⁾。1929年、同著作の第三版が出た際には、ラマーの言葉は聞くに値する情熱を与え、愛さずにはいられない、ラマーの中に「冷静で心を満たすアルピニスト」がおり、「男が山世界の自然の暴力との闘いを運命だと感じてしまうような強い意志をもつ」姿を見出している。そして「下界ではしっかり地に足をつけ、広くアモルファスな大衆とともにいる。…だが、そこから上に向かうと私の自我は山と同じほどに大きくなり、鋭く突き出た個人へと舞い上がる」と述べた部分を「共同体と個人性への信条告白」だとし、「大衆」とともにあっても登山をすることで個性を見出せ、自己の存在を意識させるものだと評価した。そして「私たちは再び興奮しながら、山での闘いを読むことができ、この著者独自の偉大さを体験」できると述べた [*NF* 1929: 183]。いわば、自然の友の活動に共感を寄せるラマーを賞賛することを通じて、登山に男性性や「ドイツ人」であること、自己そして個性の確立を意識的に見出そうとしていたのである。

3.3. 「社会主義的登山」との妥協

大戦後、8時間労働制と有給休暇制度の導入によりこれまで登山に憧れたてはいたが、実際に山行できなかった人々が自然の友には入会するようになった。戦前と同様ブルジョワ登山家協会の登山家に匹敵する会員が自然の友に所属することを本誌には記し続けたが、異なっただけでなく、労働者であるにもかかわらず、記録を挙げたことをアピールするようになった点である。ガイドを雇えなかったが、酒やたばこ代を節約したことによってガイドレスでモンブランに登頂できた会員が、自分の望みをようやくかなえることができたことと表現し、努力した様子を記した場合などが好例である。そればかりではなく、自然の友は高山登山を行おうとする人々を援助した。「本当に長い間、一度でいいからティロールへ、山の中へ行ってみたい」と願っていた「工場労働者」であるドイツのある支部長は、節約した生活を行い、来年こそはティロールへ行く望みが「なんとかかなえられそうだ。他の同志も私と同様に夢を実現してほしい」という内容をウィーンに手紙で伝えてきた。自然の友側もこれに優るものはないと述べて多くの会員に山地へと足を運んで欲しいと意思表示した。初心者会員に対する無料ガイド、山地のスライド上映会も行い、山地の支部と低地地方の支部とが相互に理解しあえるような活動を行った。そして初心者が準備もせず、高山に登る傾向に対しては批判的態度をとり、該当地域の動植物学や地質学の最低限の知識を身につけ、また心身の力を鍛えることに注意を促す戦前の態度を維持した [*NF* 1921: 56; 1922: 55, 87; 1923: 109-110; 1924: 152; 1926: 224]。

しかしながら、多人数で登山を行う集団登山が推進されていたわけではなかった。1928年7/8月号の『自然の友』誌にヴァンデルンを何名ぐらいで行うべきかを記した文章が掲載された。そこでは、ヴァンデルンや登山には一人で行くべきだと主張したのはラマーだったが、孤独な

ヴァンデルンの最中には話し相手も必要だから、2~3人程度の同志あるいは気のあった友人と一緒に行くべきだと述べられている。そして、多人数で行うヴァンデルンの価値は認めるが、人数が多いと散り散りになってガイドが苦勞し、山行仲間を谷で追いかける羽目になるのは「ヴァンデルンの退化」であり、私たちはヴァンデルンに品格を求め、心身ともに強靱に、すばらしいものにするために努力しているのであり、それが私たちの活動の意味と目的だと主張するのである。この意見とほとんど同じ内容を持つ発言が同年8月、自然の友協会の大会で編集長ハピッシュによって行われた。大人数のヴァンデルンを好まないハピッシュに対してはドイツのシュヴァーベン・ガウ（＝諸支部の地域別集団）の代表から、ハピッシュが推進するヴァンデルンは、「保守派のものであり、ブルジョワ的だ」と批判された。このガウ代表は、「私たちは社会主義的ではなくてはならず、社会ヴァンデルンを保護すべきであり」「政治的契機をより強調し」、「労働者が敵と出会った時に自衛できるような世界観を創っていかななくてはならない」と主張した。しかし、このガウ代表が発言している最中にも「それは政治組織がやるべきことだ」というヤジが飛んでいるところから、協会全体として集団ヴァンデルンを否定はしないが、積極的に進める方向にはなかったといえる。当時、協会内では小屋建設問題や『自然の友』誌の強制購読に対する反対が平地にあるドイツ諸支部から出ており、登山を本格的に進めようとするオーストリア側と対立していたことも影響していたのであろう。この点から『自然の友』誌での主張は、オーストリア側が推進する数人で行われる戦前からの登山をこれからも続けていくという意思表示だったと考えられる [NF 1928: 185; NF. Protokoll, 1928: 11, 26]。

自然の友の青年エリートグループ・アルピニステンギルドで活躍したコルプは1926年、ラマーに触れながら、ザイルやハーケンなどの人工器具を用い、友人とともに行く場合にはそれほど危険は生じないが、単独登山や天気の良い場合、克服し得ないような障害が生まれ、山と敵対する時にこそ山が私たちを誘うのだ述べている。同じギルドに属したヤーラも「最も高い頂上を登山靴の下に納めたいと願う征服者たちがいたが、...彼らの征服欲の中で最高位の王冠をかぶる山頂のうち、メイジュは最高の価値を有している。...17年間で30回以上の試みがなされたが、みな失敗に終わった。誇り高き女王メイジュは8人の重臣を従えているが、それらはただの点景に過ぎない」と述べ、この峰に登攀した。彼らの発言からは集団でヴァンデルンしたいと思う様子は見えない。しかし、ヤーラはメイジュの壁を「やる」という「誇りに満ちた望み」をかなえるために、「財布のひもを締めること」から始めなくてはならないとも記した。つまり彼にとっての登山とは「最も小さな支出も何週間も我慢しなくてはならない」そういうものだったのである。自然の友はこういう青年たちの登山欲求をかなえる必要があった。戦前のリベラルな登山を継承する自然の友が、いかにして個々人の業績や文化的価値を認めながら、貧しい青年たちに登山を行わせて生きがいを見出させるかが問題となっていたといえよう。そ

こに社会主義的な集団登山が入る余地はなかったのである [NF 1926: 68; 1927: 81-87]。

しかしながら、自然の友も一方では大会で受けた批判や党との関係から、社会主義思想をどのように登山と結合させるかについていろいろな試みを始めていた。1927年の『自然の友』誌は、ミュンヘンのローター山岳出版が出している『ドイツ・アルペン新聞』に掲載されたオーストリア社会民主党内でも最左派に属するハンス・フィッシャーの論文を取り上げ、彼が行ったスポーツにおける「スター」の出現とプロスポーツの隆盛に対する批判を再掲し、コメントを付した。自然の友は、フィッシャーがプロスポーツや商業スポーツが生み出された原因を追及していない点については批判したものの、彼が観客のいない登山においては道徳的精神的価値をまだ維持できる可能性を示唆した点に同意した。そして、スポーツ自体が退廃したわけではなく、ブルジョワ的手法・資本主義的発想でスポーツが保護され促進されたために、スポーツが変化し、身体と自然が商品化されてしまったのだと主張し、それを克服するには、集団主義的、社会主義的に思考するしか他に手段がないと述べたのである [NF 1927: 115-116]。また、別の論者ラウターバハは、現代における登山の隆盛の原因を登山が人間の弱さとの闘いである点に見出した。人間は知識を獲得したため、かつてのように自然を恐れなくなったが、自然の中での把握しがたさ、予測不可能性によってむしろ自然の崇高さを、自然との一体感を感じ、これを求めて人間は山に入り、そこでも緊張との競争を続けるのだという。知識人層は精神的にはブルジョワジーに近いが、経済的にはプロレタリアートとほとんど差がない。だが、労働者階級は自由競争を求める知識人層がもつ個人主義的な態度、つまり記録や頂上へ向かう争いを模倣すべきではなく、そこから解放されるべきで、大衆と自然との間の内面的つながりを提示し、そうした関係があり得ることを示すべきである。なぜならブルジョワジーによる考え方も歴史的に限定されたものであるように、個人主義的体験と大衆運動も相互に条件づけられているゆえ、それを統合して独自の登山を作りだしていくのが自然の友の課題だと主張した [NF 1926: 149-152]。さらに、人格形成のための登山を求めていた論者もいた。例えばチアクは、プロレタリアートは労働の機械化や大都市の様々な害から逃れ、自然の中での自由な生活をも求め、そこに若き泉を見いだすが、それこそがプロレタリアートが行うべき登山の目的であり、高さや難しさを競うアルピニズムへの道と戻ってはならないと主張している [NF 1927: 212-215]。これらについて編集部はコメントを寄せていないところから、唯物論的に登山を捉え、登山を通じて解放への道を見出す点まで許容していたのだと考えられる。

一方1927年、『自然の友』誌にはこうした社会主義的登山とは異なる方向性を持つ論者が三回ほど掲載された。投稿したコルネルは、自分は危険や業績ではなくロマンティックな山を体験したいのであり、スポーツに対する情熱が自己顕示欲をわき上がらせて、その結果生まれる業績に酔いしれる、それが登山の動機である、と正直に述べている。彼はスポーツ活動が民族・

人種衛生学を含めてあらゆる分野から身体強化の手段としてのみ重視されている点に異を唱え、むしろ精神的なものの機能に着目する。イメージトレーニングを通じて感覚、神経を自らの意思で支配すべきであり、業績を上げたいという潜在的なエネルギーもスポーツを行う大衆運動の最奥の活力であるゆえ、自己育成のための教育、自意識の高揚に利用できる。そこにあるのがスポーツ精神だ、と述べた。こういったコルネルの主張に対し『自然の友』編集部は、この発言は「私たちの努力からはかなり遠いところにあるかもしれないが」、「登山家やスキーヤーがそのテクニックを心身ともに駆使し、体験できたときに最高の楽しみを得ることができる」ことを教えてくれるだろうと註をつけている [NF 1927: 58-60, 107-110, 178-184; 1928: 67-71, 127-131; 175-179; 219-224]。自然の友は業績の希求を否定し、心身の健全な発展のためのスポーツを求めていたため、コルネルのいう「本当の動機」を肯定するわけにはいかなかったのであろうが、それでもわざわざ自然の友が誌面に載せたのは、自己育成というリベラル登山の意味が同時に述べられていたからだったといえるだろう。

だが、コルネルの文章に対しては翌年、チェルノヴィッツのマウリューパーから批判が行われた。コルネルの主張はなぜ人間を山に登らせるかという問い、いわば社会からの影響に言及されていないのが問題だとする。登山家が「情熱的」「ロマンティック」であるのは、単なる紙上の議論であり、世界を支配する「永遠の法」は「私たちを現実に苦しめている権力関係である」ゆえ、それを語らないで労働者の登山を説明することはできないと述べる。つまり、労働者に「登山を行わせるのも」唯物論的な理由があるはずであり、登山における闘いも階級闘争との結びつきで考えるべきだというのである。「階級意識をもっていない労働者ツーリストは階級闘争からの逃亡者であり」、「ヴァンデルンやクライミング、スキー」も人間として行うのではなく、「階級に定められた人間」として行うべきであり、その帰属を忘却すると「人間ツーリスト」として現存社会の支配秩序を支持することになる。そして「神聖な山中」は「中立」であるべきだという主張に同意する人々は、「階級闘争での取り組みを押しつけて」しまうのだと主張した。つまり、自然の友がブルジョワ登山家協会のリベラル登山を模倣してきた軌跡を批判したのである。マウリューパーはラマーについても言及し、社会的搾取からは目を背け逃亡した上でより高い力、永遠の法を求めて登山を行うのはブルジョワ世界の登山であると述べ、ラマーが自分の「山での体験を伝えることが道徳に反する可能性があるかもしれない」と述べた点を取り上げ、「登山における（自分たちにとっての）不道徳は、階級から逃亡することだ」と主張した。この文章に対して編集部は注意書きを加え、マウリューパーがラマーに対して行った批判を制し、社会主義者にとって最終的には階級闘争を行って階級状況を克服することが目的ではあるが、登山で獲得できる内面的価値の高い体験を否定してしまえば、生活は限りなく貧しくなるのであり、自然の中で感じる居心地の良さを見過ごして、単なる貧しい機械へと陥

ることは避けたい、そのためには「私たちの敵である資本主義をも配慮する」と述べた。このような留保はこれまで自然の友が師と仰いできたラマーとの関係を維持する必要からのみ述べられたのではなく、登山を社会主義社会実現のための階級闘争と同置して、単なる手段とすべきだという考え方を自然の友が拒否したことを示していたと考えられる [NF 1928: 231-234]。

だが、1930年末になるとライプチヒの会員から、労働者のヴァンデルンはいくまでも労働者生活の現状を見るための社会ヴァンデルンであるべきだという批判が行われ、ウィーン側もそれに応じ「あらゆる諸国で階級対立が激しくなっている」ゆえ、労働者の敵に対して闘う武器として「社会主義」系の出版物を読むように促し、また「非政治的な性格を偏愛すること」がブルジョワ的ものの見方となってしまう、「階級同志が自らの置かれた状況から逸れないよう」、「大きな共同体」として上昇し、相互扶助で強くなるべきだという注意を行うようになった。この時期、小屋の割引料金を得ていた他のブルジョワ登山家協会がドイツナショナル側のアルペン協会へと統合されることが確定すると同時に、1931年2月には労働者オリンピック冬季大会がミュルツツーシュラクで開催予定だったため、労働者側の連帯を強めなくてはならない時期にあった。よってそれに見合った主張を行う必要に迫られていたと考えられる [NF 1930: 192-193, 217-218, 235]

このように、1930年代初めにかけて自然の友協会内では特に平地の諸支部や党に忠実な会員から「労働者階級の登山」「社会主義的登山」を推進すべきだという批判が起こった。政治的対立が強まった時期に入り、自然の友はそれに応じるようになったのである。ところが、実際にはドイツナショナル側のブルジョワ登山家協会との二重会員や共同登山をも許容していた。そして、自然の友は、リベラル登山が有する文化的価値として従来から唱えられていた自然との対峙を通して得られる自立心や克己心を労働者の生へと結びつける主張を続けた。同時にそれは物質的な資本主義的価値を伴う競技や記録のみを求める登山への批判に繋がり、唯物論的な発展の過程としての登山という解釈を可能にさせた。しかし、社会主義社会実現の手段としては読書を勧め、登山を階級闘争の道具とすることには反対したのである。そうさせたのは、心身を鍛え、努力を行い頂上に立って、労働者登山家はブルジョワ登山家と平等になることで、社会的階級的格差はなくなり、仲間としての「彼ら」しか存在しなくなるという信念だったのであろう。このような思想を裏付けてくれたのがラマーの主張であり、それは自然の友が登山家協会としてやっていく参照軸として有効なものだったのである。

おわりに

戦間期オーストリアにおける登山家たちの登山思想は、彼らの所属する政治的陣営や階層差に関わらず、不安定な社会の中で登山に人間性を高める契機を見出し、生きる目的を求める点

で一致していた。登山を文化活動であるとみなし、自立を促す存在だとするリベラル登山思想は19世紀の自由主義社会において生まれたものであったが、第1次世界大戦によって、それは男性ドイツ人登山家のみが属す選別的共同体意識を含むものへと変化しはじめた。労働者向け登山家協会であった自然の友の登山家も、基本的にブルジョワ層登山家と変わらぬ思想を抱いていた。高山、難関、ガイドレス、単独登山が推進されており、それを維持することに重点が置かれていたのである。現実社会においては、下層にいることを意識していた労働者登山家だからこそ、困難な登攀の後に得られる頂上での平等感や達成感、そして優越感は彼らを魅了した。彼らは「ツーリスト」という言説に啓蒙的意味を込め、そうなる可能性を開いたのである。彼らは登山の大衆化と政治化の流れに強くぶつかり、「社会主義者」であるべきだと批判された。しかし、反対者の主張する社会主義社会実現のための「手段としての登山」を受け入れようとはしなかった。労働者登山家は、山上ではあっても、現実社会の中で自由やブルジョワ層登山家との平等、そして仲間意識を感じていたゆえ、彼らにとって言説上での「社会主義的登山」あるいは「階級意識をもった登山」は虚しいものだったのである。強き者、ツーリストのみが得られる優越感は、自立のための努力の証であったゆえ、それを正当化してくれるブルジョワ層登山家が発展させたリベラル登山思想に同意した。そこからは階層差があるとは認識されず、民族性をも同様に肯定して受容したのであった。

脚注

- 1) 1862年設立のオーストリア・アルペン協会と1869年設立のドイツ・アルペン協会(プロシア・オーストリア戦争でオーストリア側から参戦した諸国の登山家がミュンヘンで設立)が1874年統合されて作られた登山家協会。
- 2) アルペン協会オーストリア支部の会費は自然の友の会費の6倍だった[古川 2014: 12]。会長ロウラウアーはツーリストクラブ会員[Amstädter: 277]、編集長を創設当初から解散まで務めたハビッシュの友人でオーストリア山岳協会を創設したゲルバースはハビッシュの印刷工仲間であり[NF 1918: 92]、また、毛皮加工業を営む工場主兼商店主のバルタと社会民主党政治家エーレンボーゲンがアルペン協会オーストリア支部会員だった[N. Austria 1904 (XIII): 45; 1905 (XIV): 7]。
- 3) Eugen Guido Lammer (1863-1945)、下オーストリアのローゼンブルク生まれ、ギムナジウム教授・登山家、多数の単独・高山・難関登山を行う。1884年アルペン協会オーストリア支部及びオーストリア・アルペンクラブに入会。山行記多数。主著はラマーが1884年～1914年の間に書いたものまとめた『若き泉 Jungborn』[Walkner 1995: 189-190]。
- 4) ヨーロッパのドイツ語圏では、一般に登山家を表象する単語として「ツーリスト Tourist」が「登山家 Bergsteiger」と共に用いられおり、善良な意味がそこに含まれていたとは言えない[Herders :502; Pierer's :729; Meyers : 648; Brockhaus : 853]。
- 5) 1915年6月時点でアルプス戦地には少なくとも直接的な戦闘地域に59軒のアルペン協会の小屋があり、さらにより広い地域にはおおよそ100軒の小屋があった[MDÖA 1915: 125; Rotte]。
- 6) 高山登山を行うことが有用なものであるとするイデオロギー。
- 7) ギュンターは山岳戦が大量殺戮の、機械類を駆使した総力戦とは異なるものだったのだとも主張している点については肯首しかねる。実際にはかなりの標高まで大砲が運ばれて大量の爆薬による破壊と

- 戦死者を出したからである。以下を参照 [Hämmerle; Heidl 1993; 1997; Klavor; Kübler; Lichen 1996; 1997a; 1997b]。
- 8) アムシュテッターは、ドイツ国民主義と登山が結びつけられた過程をドイツ観念論における全体性の重視という点から説明し [Amstädter: 321-322]、ケラーはアルペン協会全体が個々人の業績から民族を強化するためのアルピニズム推進という方向へとシフトし、アルピニズムが民族を形成すると信じていたと主張し、それが登山の民主化を推進する側とエリート主義側の共通点だったとした [Keller: 87]。
 - 9) フォルシャー＝マイヤーはアルペン協会インスブルック支部長として、ピヒルがアエリア条項をオーストリア支部に導入する目的で支部長になった直後にティロールの諸支部にアエリア条項を入れるよう促した [Achrainer 2009: 296, 313] オーストリア支部の小屋建設促進については拙稿 [古川 2014] 参照のこと。1926 年のオーストリア支部報告によれば、1925 年アルペン協会全体で建設、買取等を通じて獲得した小屋数は全部で 84 軒あり、そのうちオーストリア支部は 9 軒であった。内訳は建設中 2、当年に開設された小屋 4、賃貸借契約 1、購入済み 2 となっている [N. Austria 1929: 8]。
 - 10) 1925 年大会ではアルペン協会の方向性としてツーリズム開発が促進されることに同意が得られたが、1927 年の大会では「アルプスの知識を一般に広げ、東アルプスへの旅行を容易くする」という 1874 年に記された第 1 条「協会の目的」が、登山家グループの出した動議に基づいて「高山の知識を広め、登山を促進し、東アルプスにおけるヴァンデルンを容易くする」へと変更され、満場一致で承認された。この時点において、ツーリズムのための開発促進側と登山とヴァンデルンを登山家が行うべきとする側が妥協した [MDÖA 1927: 224-226]。
 - 11) 1911 年に書かれたアルペンクラブの年報で確認したが、この部分は 1922 年の『若き泉』発刊時に挿入されている。
 - 12) ラマーは 1921 年ピヒルがオーストリア支部にアエリア条項を導入すると、それに反対して同支部を退部した [Mailänder 2009: 249]。
 - 13) 押収されたのは具体的な戦闘の様子や負傷した時の様子を生々しく描く部分を含むようなものだった。例えば大戦中ドロミーティ山中で雪崩に遭遇し負傷・死亡した会員の記事など。
 - 14) 「タート Tat」という言葉は第 1 次世界大戦後、エルンスト・ニーキッシュ等がマルクス主義でもなく、西欧の資本主義でもない「ドイツ的社会主義」を実現するための「保守革命」を行う際にとる行動を意味し、また彼のグループを指す言葉でもあり、同名の雑誌も発行された [Werth: 124-169]。1920 年にこのニーキッシュ的な意味での「タート」が自然の友で利用されていたとは考えにくいだが、1928 年になるとドイツ諸支部からの「ブルジョワ的」小屋建設批判を躲すために「タート Tat の社会主義」という言葉が用いられており [NF. Protokolle: 43-44]、その際には社会主義と資本主義の間というニュアンスが含まれていたと考えられる。
 - 15) 1921 年 11/12 月号のウィーン支部ニュースレターにおいて、ラマーが『オーストリア・アルペン新聞』に書き綴った文章を集めて『若き泉』が出版されたことが紹介され、1932 年『若い泉』のフランス語版が発刊された際にも同様な感想を述べて紹介した。

参考文献

(刊行史料)

- ABZ *Allgemeine Bergsteiger Zeitung*.
 ZDÖA *Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins*.
 MDÖA *Mitteilungen des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins*.
 M. Wien, NF *Mitteilungen der Ortsgruppe Wien, Beilage zum „Naturfreund“*.
 N. Austria *Nachrichten der Sektion Austria des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins*
 NF „Der Naturfreund“. *Mitteilungen des Touristen-Vereins „Die Naturfreunde“*.
 ÖAZ *Österreichische Alpen Zeitung*.
 NF Protokoll Protokoll der XI. Hauptversammlung des Naturfreundes, zu Zürich, 17. – 19. August, 1928.

(未刊行史料)

Happisch, Leopold 1970 *Geschichte der Naturfreunde. Zeitraum 1895-1933/34*, Wien, Maschinschrift.

(同時代文献)

Brockhaus' Kleines Konversations-Lexikon 1911 Band 2.

Herders Conversations-Lexikon 1857 Band 5.

Lammer, Eugen Guido 1908 *Zur Psychologie des Alpinisten (Eine Besprechung)*, in: *MDÖA*: 47-49.

————— 1922, 1923, 1929, 1935 *Jungborn. Bergfahrten und Höhengedanken eines einsamen Pfadsuchers*, München, Bergverlag Rudolf Rother.

Meyers Großes Konversations-Lexikon 1909 Band 19.

Pichl, Eduard 1927 *Wiens Bergsteigertum*, Wien, Druck und Verlag der Österreichischen Staatsdruckerei.

Pierer's Universal-Lexikon 1863 Band 17.

(論文・著作)

古川高子 2002 『自然』による啓蒙-20世紀初頭オーストリア『自然の友』協会の活動から『Quadrante —クアドランテ(四分儀)—地域・文化・位置のための総合雑誌』4: 271-300

————— 2008 「博物学とツーリズムの結合にみる政治性-20世紀初頭オーストリア社会民主党「自然の友」協会の選択-」『クアドランテ(四分儀)—地域・文化・位置のための総合雑誌』10: 448-480.

————— 2014 「大衆政治化期オーストリアにおけるリベラル・ツーリズムの展開」『東欧史研究』36, 3-25.

————— 2018a 「戦間期オーストリアにおけるナショナルツーリズム—E. ピヒルの思想と活動から」『現代史研究』64, 1-17.

————— 2018b 「「赤いウィーン」の自然思想—自然の友によるカラロとの断絶を問う」、『東京外国語大学論集』97, 58-82.

————— 2019a 「国民化される「内部の自然」—「赤いウィーン」市政下の自然の友による受容と抵抗」『東京外国語大学論集』98, 13-38.

Achrainer, Martin 2009 "So, jetzt sind wir ganz unter uns!" Antisemitismus im Alpenverein, in: Hanno Loewy/Gerhard Milchram (Hg.), *"Hast du meine Alpen gesehen?" eine jüdische Beziehungsgeschichte. Eine Ausstellung des jüdischen Museums Hohenems und des Jüdischen Museums Wien in Kooperation mit dem Österreichischen Alpenverein*, Hohenems, Bucher Druck Verlag Netzwerk, 288-317,

————— /Nicholas Mailänder 2011 *Der Verein*, in: der Deutsche Alpenverein, der Österreichische Alpenverein u. der Alpenverein Südtirol (Hg.), *Berg Heil! Alpenverein und Bergsteigen 1918-1945*, Wien/Köln/Weimar, Böhlau, 193-318.

Amstädter, Rainer 1996 *Alpinismus. Kultur-Organisation-Politik*, WUV-Uni-Verlag, Wien

Gidl, Anneliese 2007 *Alpenverein. Die Städter entdecken die Alpen*, Wien/Köln/Weimar, Böhlau.

Günther, Dagmar 1998 *Alpine Quergänge. Kulturgeschichte des bürgerlichen Alpinismus (1870-1930)*, Frankfurt a.M./New York, Campus Verlag.

Hämmerle, Christa 2006 "Es ist immer der Mann, der den Kampf entscheidet, und nicht die Waffe ...". Die Männlichkeit des k. u. k. Gebirgskriegers in der soldatischen Erinnerungskultur, in: Hermann J. W. Kuprian/Oswald Überegger (Hg./ed.), *Der Erste Weltkrieg im Alpenraum. Erfahrung, Deutung, Erinnerung. La Grande Guerra nell'arco alpino. Esperienze e memoria*, Innsbruck, Universitätsverlag Wagner, 35-60.

Hanisch, Ernst 1994 *Der Lange Schatten des Staates. Österreichische Gesellschaftsgeschichte im 20. Jahrhundert*, Wien, Ueberreuter. (=岡田洋平訳 2016『ウィーン/オーストリア二〇世紀社会史 1890-1990』三元社)

Heidl, Hanns 1993 *Im Banne der Julier. Ein Leben für Die Berge. Geschichte und Geschichten um Dr. Julius Kugy*. Bd. I, Villach, Kreiner Druck und Verlag.

- 1997 *Im Banne der Julier. Der Erste Weltkrieg und das große Ringen in den Bergen. Geschichte und Geschichten um Dr. Julius Kugy*. Bd. II, Villach, Kreiner Druck und Verlag.
- Judson, Pieter M. *Exclusive Revolutionaries. Liberal Politics, social Experience, and National Identity in the Austrian Empire, 1848-1914*, Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- Keller, Tait 2016 *Apostles of the Alps. Mountaineering and Nation Building in Germany and Austria, 1860-1939*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press.
- Klavora, Vasja 1993 *Blaukreuz. Die Isonzofront, Flitsch/Bovex, 1915-1917*. Aus dem slowenischen übersetzt von Hanzil Filipič, Klagenfurt/Ljubljana/Wien, Verlag Hermagoras/Mohorjeva.
- Kübler, Peter/Hugo Reider, 1996 *Krieg um Sexten*, Bozen, Verlagsanstalt Athesia.
- Lichen, Heinz von 1996 *Gebirgskriege 1915-1918, Orter, Adamello, Gardasee*. Band 1. Bozen, Verlagsanstalt Athesia.
- 1997a *Gebirgskriege 1915-1918. Die Dolomiten Front*. Band 2, Bozen, Verlagsanstalt Athesia.
- 1997b *Gebirgskriege 1915-1918. Karnische und Julische Alpen, Monte Grappa, Piave-Isonzo*. Band 3, Bozen, Verlagsanstalt Athesia.
- Mailänder, Nicholas 2009 Jüdische Beiträge zu Alpinismus, in: *Hast du meine Alpen gesehen?*, 240-257.
- 2011, Spitzenbergsport, in: *Berg Heil*, 87-173.
- Pelinka, Anton 1997 Taboos and Self-Deception: The Second Republic's Reconstruction of History, in: Günther Bischof/Anton Pelinka (eds.), *Austrian Historical Memory and National Identity*, New Brunswick / London, Transaction Publishers, 95-102.
- Rotte, Ralph 2006 Politische Ideologie und alpinistische Ideale. Die Wahrnehmung des Krieges gegen Italien im "Deutschen und Österreichischen Alpenverein" 1915-1918, in: *Der Erste Weltkrieg im Alpenraum*, 119-144.
- Thorpe, Julie 2011 *Pan-Germanism and the Austrofascist State, 1933-1938*, Manchester/New York, Manchester University Press.
- Walkner, Martin 1995 Der Junge Eugen Guido Lamme. Zur Entstehung des modernen Alpinismus im Wien des fin de siècle. Mit Chronologie und kommentiertem Werkverzeichnis. Magisterarbeit, Salzburg University.
- 1996 Zur Entstehung des modernen Alpinismus im Wien des fin de siècle. Die Bedeutung von Eugen Guido Lammer, in: *Zeitgeschichte*, 23(9/10): 291-305.
- Werth, Christoph H. 1996 *Sozialismus und Nation. Die deutsche Ideologiediskussion zwischen 1918 und 1945*, Opladen, Westdeutscher Verlag.